音声活動を重視した、言語運用能力の正確性を向上させる指導
～ＩＣＴを活用したリフレクション活動を通して～

福島県立相馬高等学校　教諭　川村　智

１　研究の趣旨

2020年度に始まる「大学入学共通テスト」の英語について、実用英語技能検定などの民間試験とマークシート式の両方を全国立大82校の受験生に課す方針が決まった。民間試験の活用で、「読む、書く、聞く、話す」の４技能が測られ、受験対象となる現在の中学３年生は、「話すこと」の技能向上が急がれる。

平成34年度からの次期学習指導要領においても、話す技能を「やりとり」「発表」領域へと細分化され、自分の意見などを適切な語彙・表現・文法を用いて論理的・批判的に話す発信力の強化が謳われている。

スピーキング試験にはＣＢＴでの録音形式がある。ＴＥＡＰは「適切なイントネーション、聞きやすさ」を、ＧＴＥＣでは「正確な発音」を評価基準に挙げている。生徒は、話す内容が適切であることに加え、発音の正確性にも注意を向ける言語運用能力が求められる。一般に日本人は母語の影響を受け、発音が不明瞭になる傾向がある。しかし、発音練習では、流れるＣＤの音を生徒が繰り返し模倣するパタン・プラクティスが定着し、生徒自身が正確さを欠いた発音に気付かず、不適切な発音が定着する弊害もこれまで考えられた。従って、英語と日本語の音韻の大きな違いに気づかせ、正確な発音の習得に向けて、練習と訂正を継続して学習できる環境を整えることが望ましい。

そこでＩＣＴ機器を活用し、リフレクションする機会を与え、正確な発音を獲得させることを考えた。同時に、ＩＣＴの利便性を生かし、主体的に学習する態度の育成をめざし、本研究主題を設定した。

音声を重視した指導を行い、ＩＣＴ機器を利用して自己の発音をリフレクションする機会を与えれば、発音に注意が向き、言語運用能力の正確性が向上するであろう。

２　研究の概要

第二言語習得研究により、外国語習得の主要因はインプット（聞いて読んで内容を理解すること）であることが科学的に証明された。授業では、生徒への十分な音声インプットを確保し、音声形式への注意を喚起させ、生徒へ正しい発音を定着させるために以下の３つの手立てを考えた。また、授業は、文字情報だけではなく音声情報を重視した内容中心授業を行った。

(1) 手だて１　多量の音声インプットを与える授業の充実
(2) 手だて２　正確性を向上させるＩＣＴ機器を用いた発音活動
(3) 手だて３　発音を振り返らせるポートフォリオ評価の充実

検証方法には、発音の正確性の変化を測るため、Windowsのサウンドリコーダーにて生徒の発音を録音し、また手だてを行う前の発音を点数化し、手だてを行った後の点数との比較を行った。採点者は、所属校に勤務するＡＬＴと日本人英語教師があたった。

３　成果と今後の課題

(1) 研究の成果

① 実践後では、単語と本文の発音の正確性に向上が見られた。65％の生徒に、正確性の向上が認められ、また「理解しやすい発音」をする生徒の割合が単語の発音、本文の音読ともに増加した。
　これらの結果から、多量のインプットをリスニングで与えることにより、生徒はより音声に注意を向けることができたと思われる。実践後のアンケートにおいても、９割の生徒が「発音をよくする場合、英語でのやり取りや、ＣＤをたくさん聞くことで、発音の正確性が増す」と肯定的な回答をした。

② 音声に注意を向けさせる授業を構成し、自分で訂正しようとする意識を高めていき、その中でＩＣＴを効果的に活用することで、発音の正確性が向上することが分かった。

(2) 今後の課題

① 意見文で発話された発音では、不明瞭な発音になる傾向があり、内容においても不十分な発話に終始する生徒が多数を占めた。

② 今回、生徒自身が意識できないことに注意を向けさせながら、発話させることに苦慮した。インプットと充分な話す機会を平衡させる上でも、今後ＩＣＴの活用は有効になると考える。そこに、教師の適時的な指導を加え、生徒の発話を支援する教師側の介入の工夫も必要になってくると考える。